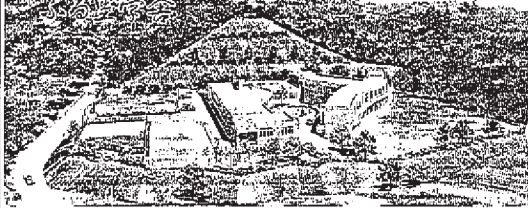


社会福祉法人 佑啓会



佑 啓

社会福祉法人 佑啓会 ふる里学会
〒290-02 市原市今富 1 1 1 0 - 1
☎ 0 4 3 6 - 3 6 - 7 6 1 1
発行者 里 見 吉 英
編集者 三 股 金 利

百聞と一験

愛媛県海外福祉事情視察に参加して

十二月三日、日本の太陽はまだよく、いくらはぼつとすると味わいであつた。

愛媛協会主催の海外福祉事情視察に参加し、十二日間の北欧の旅をしてきたのである。

施設長の「苦勞をかけたから理事会に推薦する。」との温かい言葉。しかし北の海に墜落したら冷てえだらうな。下の子はまだ三才だなどと思つてゐるうちに、当日早朝、施設長自らお迎えである。「まるでVIPだねえ。」などと冗談を言つていたものの保険は一億円で大丈夫だったか、などと考えながら千翠の風景を車中から眺めていた。

視察団は、北海道から九州までの老若男女(失礼)、立場も様々であるが福祉に対する情熱を感じさせる二十一名と添乗員と私である。

フィンランドは最初の目的地、機中十時間以上を過ごさなければならぬ。

果たして隣のオジサンのおさんは人の良い福祉人であつた。機内はアルコール飲み放題。二人で飲みながらお互いの施設の情報交換「ぜひ今度。」お互いに来てくださーいと言ひながらまどろんだ。

ホテルの部屋にたどり着くまでに二十時間近くかかつていた。幸いというか時差が八時間ある為、睡眠時間はとれるのだが緊張と興奮で眠れない。時差を利用して旅をすれば、年をとらないのではなにかなど馬鹿なことを考へてしまった。しかし代わりに命がとら

れると思ふほど疲れた。

この国の冬は夜だ。朝の九時頃にならないと白々としてこない。暗れても光は鈍い。三時頃には暗くなり始める。しかも寒い。

私は通訳のミサコさんに尋ねた「この国の人達は何かヒゲを伸ばしているのですか。」もちろんプライベートの時間に。彼女はフィンランド人と結婚し生活している。「それは、日本人は何かヒゲを剃るのという質問と同じよ。」私は宗教上の、あるいは哲学、もしかしたら「ヒゲを伸ばしている」と暖かい人じゃやないの。」という言葉が返つて来るのではと予想していたので顔が赤らんだ。人が何をしようと思惑をかけなければいいんじやないのと言外に感じたのだ。

個人主義の国なのである。そういえば、陸上の国際大会で外国の女子選手がゴールする時のワキ毛を見てドキッとするのは日本人だけなのかもしれない。

夏のバカンスに四週間も休んでしまつたら入所施設はどうなるのだらう。素朴な疑問にも「権利だから。」

権力によつて個人が失われた時代を歴史に残して来た国々(権力を象徴する建物が文化遺産となつてゐるのも皮肉だが)、民族間の争ひ、隣国と外国と接する人々。個人主義と言ひながら国家に対する意識の深さも感じさせ

ヘルシンキでは、サラエボに対するチャリティーコンサートを開く機会もあつた。EU加盟に対する国民投票の率の低さ、日本人の政治に対する関心の低さ、様々なことを考えさせられた。

数年前、寮生のみで外出をさせたことがあつた。この二人、一人は旅慣れている(外出慣れ)もう一人はいつも添乗員(職員)付きであつた。旅慣れた一人がレストランに連れて行き、ランチを頼んだ。片方は、「らんち。」と同様に注文したつもりであつたが、出てきたものはライスのみ、それ

そのの星食をとり帰つてきたのである。当時遅くしてよるしいなどと笑つて済ませたが、全く同様のことを私はフランスで経験したのである。

夕食の後ジャズクラブに行き、まばらな席のひとつを選びウィスキーに口をつけた。そのうち観光地のように日本人が押しかけるであらうとの予想に反し、十時三十分からのステージに合わせ入つてくるのは外人(外人は私であつた)のカップルばかりである。

エキサイティングなステージが終わりほろ酔いかげんの為、帰ろうとウェイターを呼んだ。「BI LL 精算書を持って来て。」ニコツと笑つて戻つて来た彼の手にはビールである。LとRの発音が悪かつたのだと思ひながら再び飲み続けた。次のステージはアルコールのせいで更に盛り上がった。午前二時になり、同じ失敗は許されないと今度は、今まで飲んだものを全てあげ、帰りたいから精算したいと言つた。ところが「OK, OK。」と言うばかり、フランスではフィンランドやベルギーのように英語が通じない。今まで飲んだ物をもう一度出されては大

変である。説明を詰めてウェイターにおやすみを言つた。

翌朝、部屋での飲み物分だけを堂々と円で支払い、ホテルを後にした。パスの中、何もなかったという安心感と罪悪感が交錯した。私もとうとうKさんのように無銭飲食をしてしまったのである。たぶん相席になった大男のBILLに私の分も入つてしまったのだらう。

地下鉄に乗れば目的地に着いたのにドアは開かない。当惑する我々を見て乗客がドアを開けてくれた。同行の女の子が街で転倒せば大声をあげて駆けつけるのは現地の男。私はあらためて日本男児であると再確認できたのである。

施設長は、福祉人を育てる前に社会人を、というのが口癖である。私はそれを越えて国際人になつてしまおうと思つたが無理であつた。

すべて、「百聞は一見に如かず」であつた。言葉・文字が理解できない。社会のシステムが不明である。予習不足も一因であつたが、まさに施設生活から一歩外に出た心境である。どこでも不安がつきまとう。ホテルの部屋以外出たくない。でも出てみたい。欲求を満足させる手段が持てないだけなのである。

日本にいれば私とて一応社会生活はしている。文字が読めて会話ができれば自分の行きたい所へ行ける。今回その両方の手段を失つたことは大きな体験であつた。私達が対象としている人達だけでなく、ハンディキャップを持つてゐることの重さ。理解しているつもりであつたが大きな間違ひであることに気付かされた。

「百聞よりも一見」これも一理

しかし、「一見」よりも「一験」ではないか。見る刺激は聞くよりも具体的であるが、体験はより具体的な行動の試みであり結果を伴う。直に確認ができる。

自信を持てたり、失つたり。人生半ばにして貴重な機会をいただいた。福祉の状況を視察する旅であつたが、自分自身を見つめる旅でもあつた。

フィンランドでも、ベルギー・フランスでも経済不況という。そこに思ふようにいかない状況がある。失業率十パーセントを超える現実が高負担・高福祉にどう影響するのか。福祉の領域だけで福祉は語れない難しさを感じた。

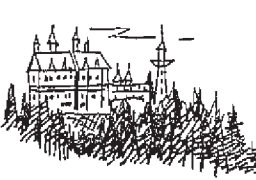
福祉先進国というイメージは今回の視察では特に感じなかった。地域生活を理想としてゐる。それをどう具体化するのか、が問題であり、考え方は日本とほとんど変わらない。

人間の根本は同じで、愛と憎しみがあるだけなのだ。弱者に対する情も勿論、手法が違うだけである。

二チエは言った。同じ港から出た二隻の船も、雲煙彼方の星の世界から見れば同じ方向へ進んでいるのだと。

指導係長 三股 金利

今回は視察番外編でした。次号には、視察の報告をしたと思います。



愛護協会主催 給食研修会開催される

長良 幸男

去る十一月二十一日、ふる里学舎において千葉県愛護協会主催による給食研修会が盛会に開催されました。

当日は天候にも恵まれ、愛護協会の研修部長の請井施設長を始めとして、県下三十三施設、七十二名の皆さんをお迎えしました。給食研修会とは、県下施設の栄養士、調理員、指導員の方々が一堂に会し、開催施設の概要と施設見学、昼食会(園みにこの日は利用者になり、人気の味噌ラーメン、焼きそば、タピオカ、ココナツミルクというメニューでした)また講師による講演と、施設間で給食に関する情報交換をするものです。

講師は、ふる里学舎の石井榮義士が務めることになりましたが、学舎に勤務する前は十年間、病院給食に携わってきたベテランです。

施設入所者にとって食生活が占めるウエイトは我々よりも極めて高く、また楽しみの一つともいえます。講演の中で利用者の嗜好調査の話がありました。毎年実施する調査ですが、昨年度は職員が代弁し、今年度は保護者に記入してもらったものです。

調査内容は、肉・魚等三十八の項目に「好き」「普通」「嫌い」を書き込み、集計したものです。「嫌い」については二回ともほぼ同じ傾向がでましたが、「普通」の欄については職員の間では極めて少なく、殆どが「好き」となっているのに対し、保護者のものは「普通」が「好き」を上回っている傾向がみられ、自然な調査結果に感じられました。施設内での食事は限られており、給食は残さず食べざるを得ない状況にあることも理由の一つで、開所後半年で「普通」と「好き」の判別は職員にとって非常に難しかったようです。

施設では残食がとて少ないのに対し、病院で残食が多いのは、見舞い客などからの差し入れによるものと分析してありました。現在、食品の種類が多様化してきており、嗜好は、尊重されるべきものではあります。

が、これがエスカレートしてゆくと単なる偏食となってしまう、かえって利用者自身が苦勞する結果を招いてしまいます。また近年、栄養過剰・摂取過剰が成人病の若年化をもたらしているが、施設利用者においても例外ではなく、そうした面からもバランスのよい食生活と嗜好を、うまく取り入れながらの献立作りが要求されます。

そのほかでは、いかに家庭的な雰囲気作りができるかという話になり、強化磁器から本意でいるメラミン食器への移行へのいきさつ。また、あくまで手づくり給食・行事食に対するこだわりや、夕食を六時にするまでの指導サイドとのやりとりなど、施設での栄養士や調理師の立場の難しさについての率直な講演は、同じ職種で働く人達の胸をうつものがあつたようです。

その後は、しもふさ学園の小林施設長の進行で情報交換の場となりましたが、縁々々角度からの問題提起のもと、現在の悩みや体験談など更には自慢話まで、活発に現場の声が出されました。

こうした、盛況のうちに研修会は無事終了する事ができましたが、参加された方々は、どの様な感想を持たれたのでしょうか。何か一つでもそれぞれの施設に持ち帰るものがあつたならこの研修会は成功だったと思います。当学舎もこれを契機に更に充実した食事の提供ができるよう精進してゆきたいと思ひます。(庶務係長)

山口さん家の帰省日記

一完結編

今回の帰省中は次のふたつのことに徹底的にこだわりました。ひとつはチェックペン遊び。もうひとつはアロンアルファ。

チェックペンの方は印刷物の文字の1行を赤いチェックペンで赤くし、「消して!」と妻にいわれてからその色を消す方のペンを用いて消すという遊び。アロンアルファの方は家中の物、例えばナベのふたのつまみ、壁紙のふち、等々何でもはりつけてしまうというもの。はりつけられては困るものも多いので見張っていなければならず大変だった。

これに加えて例の洗濯とトイレトーパー替え、そして新聞チェックと、それに幼児用乗物乗りの順序、他にレーザーディスクのデッキへ入れる順序、空ケースの置き方の決まり、洗濯機終了のプザーで電源を切る等、自分で作ってしまった決まりにがんじがらめである。まだある。寝る時は枕の上に4つにたたんだタオルを置く、横にそれとは違うたたみ方をしたタオルを1本置く、など、見ていて本当にかわいそうになってしまう。あつままだまだある、ある!車に乗る時の決まり、トイレの入り方・・・

これは、子供の頃からの「きまり」が大きらいで、ふとんがきらいで、ねまきがきらいで、洋服がきらいで、靴がきらいで、ひげそりがきらいで、旅行がきらいで、風呂も便所もめんどろ、便所などできるものなら一日中入って、その後1ヵ月入らずにいられないかなどとマジに考えちゃう父親。すなわち私のたたりだろうか・・・いや本当にそうかもしれない、だとしたら父親は一生懸命こうやに尽くしてやらねばなるまい・・・とは思ふのだがやはりへたるのである。私と妻をこきつかってへとへとにさせておいて、妻は「実におしあわせ」いいなアこうやって。」

昨今障害者スポーツが盛んになる中、十一月一日に第一回千葉県知的障害者フライングディスク大会が行われ、ふる里学舎からは六名が選手として参加しました。フライングディスクという馴染みが薄いかも知れませんがフリスビーを用いた競技だと言えは分かりやすいかと思ひます。競技内容はアキユラシーという、直径一メートル弱の輪にディスクを投げ、通過した数を競うもの、ディスクスタンスという、ディスクを投げてその距離を競うものがあります。従来のスポーツと違い、障害の軽重や年齢を問わず、比較的気軽に取り組むことができるのが特徴です。学舎では大会に向けて、昼休みなどの作業の合間やクラブ活動の時間を利用して練習にいらしていただきました。アキユラシーで使う的も(金銭的な関係か?)竹を用いて職員の手作り。形はいびつでしたが練習にも熱が入りました。当日は寒くとも風が強い日でしたので、ディスクをうまく投げることが出来たのか、普段の練習の成果を発揮できるか心配でしたが、他の選手も同じ条件の中でやるんだから大丈夫と心に言い聞かせて大会に臨みました。この大会には県内二十一施設から、総勢三百名余りの選手が出場しました。下は十代から上は五十代まで幅広い年齢層の方たちが参加し、もちろん女子もいました。(残念ながら学舎から女子は出場しませんでした。)他施設の多数多にいる選手の中で、職員を含めた九名がグ

桑折君優勝

ランドに並んでいる姿は心細く感じられましたが、しかし今まで頑張ってきた練習を重ねたのだから思いきり力を発揮して欲しいと思ひました。当日私は、補助役員として参加していましたが、六名の活躍を全て見ることはできませんでしたが、アキユラシー競技の時、私が担当している所へ偶然にも桑折君が参加しました。記録を取る傍らで、競技を見守りました。桑折君は手渡されたディスクを丁寧によく投げつけています。それが功を奏してか、他選手が風に苦しむ中、十枚中七枚を的中し、見事二十歳代の部で(七十五人参加)優勝しました。他の選手も健闘したのですが、緊張してかいつもの力を出せず惜しい結果となりました。しかし、アキユラシーがダメでもディスクスタンスがある。そう気を取り直し、昼食を済ませて競技に臨みました。ディスクスタンスでは、横から強い風が吹いていた為、どの位飛ぶのか想像もつきませんでした。選手の中には風でディスクが元に戻ってしまった人もいて、競技は半ば運を天に任せる様な形になってしまいました。それでも学舎の選手は風に負けじと健闘してくれ、十八歳以下の部で前田君が九位、二十歳代の部で智美君が五位、三十歳代の部では渡部君が五位と素晴らしい成績を収める事ができました。それも今まで限られた時間の中で練習に励んできた結果だと思ひます。来年も今年の記録を塗り変える位頑張ってくださいと思います。

指導員 村上 恵美

「ねえ、あとなんこでお正月?正月はうちで餅一杯食うんだよ」と目を輝かすSさん。もうそんな時期なんだとはつと気付く職員。慌ただしく過ぎたこの一年。来年も良い年でありますように・・・指導員 松橋 達也